

「オネエ所長の調査ファイル」 # 18

山崎浩治

1

「所長は女装すると、女のスイッチが入るんですか？」

「あたしの場合、むしろ空想のスイッチが入るわね。品のいいフレンチなお洋服を着れば、その瞬間から気分はパリジェンヌ。美しいマドモアゼルになるわけ」

「風景とかも違って見えたりします？」

「もちろんよ。金沢の街を歩けば犀川がセーヌ川に、香林坊の百万石通りはシャンゼリゼ通りに、鼓門が凱旋門に見えてくるの」

「それじゃ、金沢城公園のお城はベルサイユ宮殿ですか？ って、それは空想というよりも、幻覚ですよ！」

とある平日の午前中、「金沢プライベート・リサーチ」でオネエ所長の市山とイケメン調査員の透が他愛ない会話をしていると、母親の百合子(52歳)に付き添われた美月(24歳)がやってきた。

離婚後、工場のパート事務をしながら女手一つで美月を育てた百合子は現在、娘とともに金沢市内にある2DKマンションで暮らしているという。緊張した面持ちの百合子が口を開いた。

「最近、娘の様子がおかしいんです。急に痩せてきたと思ったら、夜中に大声を出したり、意味の分からない独り言をぶつぶつ言ったり。精神病じゃないかって心配なんですけど、娘は病院に行きたがらないし。どこに相談したらよいか分からず、ここに来ました」

地味な服装、大雑把に後ろで一つに束ねた黒髪、化粧っ気のない顔の美月は仕事を1カ月前に辞めていた。メンズスーツ姿の市山がそれとなく観察すると、美月は頬がげっそりとかげ、額に異常に汗をかいている。神経質そうにまばたきを繰り返し、手にしたペットボトルをひっきりなしに口に運んでいた。典型的な症状だ、と市山は思った。

「あなた、覚醒剤やってるでしょ」

ずけずけした物言いで聞くと、美月が素直にこくんとうなずく。思考停止の状態だったのかもしれない。傍らで百合子が息をのんだ気配が伝わる。美月の瞳をまっすぐ見つめた市山が言った。

「悪いことは言わないわ。いますぐ警察に自首しなさい」

2

透が運転する車に乗った美月は百合子とともに最寄りの警察署に出頭した。署内に消えていく姿を見届けた透が助手席の市山に不満そうな顔をして言った。

「依頼人にいきなり自首を勧めるなんて……」

「家に覚醒剤があるなら、すぐに捨てなさい、と証拠隠滅の教唆でもすればよかったかしら？」

「いや、もっと何かアドバイスできることはあったんじゃないかって……」

「あのねトオルちゃん、覚醒剤は家族や周囲があれこれ助言してやめられるものじゃないの。まずは警察に行くべき。放置しておけば、彼女はますます深みにハマっていくし、重大な犯罪を起

こすかもしれない。それからじゃ遅いのよ」

透がため息とともに、言葉を漏らした。

「……あんな大人しそうな女の子が覚醒剤だなんて」

「以前は覚醒剤といえばヤクザというイメージだったけど、覚醒剤をやるようなヤクザは組織からだって破門されるわ。錯乱して事件は起こすし、ドラッグ欲しさに平気で自分の組を裏切るからね。いまでは覚醒剤に手を染めるのは、ごく普通の人たち。安価で入手できるから、ほんの軽い気持ちで始めて、二度三度と繰り返すうち抜け出せなくなるの」

「警察に出頭した彼女は、どうなるんです？」

「覚醒剤取締法違反の疑いで逮捕。初犯だから懲役1年6カ月、執行猶予3年というところでしょうね」

「刑務所に行かずに済むんですね」

「でも、問題は`出てきた後、よ。覚醒剤は犯罪の視点で考えられがちだけど、実は`心の病気、なの。罪を償ったからって解決する問題じゃないのよ」

ところが自首したはずの美月は逮捕されなかった。署内で覚醒剤使用を判定する尿検査の結果、覚醒剤反応が出なかったため、その日の夕方には釈放されたのである。最後の使用から1週間経過していたので、反応が出なかったようだ。警察が家宅捜索を行わず、美月を釈放したのは泳がせるとことで密売人をおびき寄せる意図があったのかもしれない。

百合子は市山のアドバイスに従って、その日のうちに閉鎖病棟を備えた総合病院に美月を入院させた。

3

美月は高校を卒業後に就職した会社は2年足らずで退職した。子どものころから人付き合いが苦手な極度の人見知り、それゆえ仕事で分からないことがあっても上司や先輩、同僚に相談することができない。自分の判断でやってしまうからミスが多くなり、やがて職場で孤立し、居づらくなったのが退職の原因だった。

その後、派遣会社に紹介された会社や求人情報誌で見つけた接客業に就職してみるものの、朝起きて出勤しようとする金縛りになったように体が動かず、どこで働いても長続きしない。転職を繰り返すうち、医師に処方してもらった抗うつ薬を飲みながらどうにか仕事を続けられるようになったが、しばらく服用すると効き目は次第に感じられなくなっていく。LINE掲示板でもっと強い薬はないかと探していた時、出会ったのが「性格が明るくなり、小さなことでクヨクヨ悩まなくなる」という触れ込みの覚醒剤だった。

そこでやりとりされる情報によると、覚醒剤は「月に一度くらいの使用で、鼻から吸引していれば中毒にならず、いつでもやめられる」ものらしい。LINEのチャットを通じて「2万円で分けてあげる」と持ちかけられ、「一回だけ試しに」という好奇心で購入すると、宅配便で白い結晶が送られてきた。

動画サイトにアップされていた「マニュアル」を参考にしてアルミホイルに粉末を置き、ラ

イターであぶって気化したものを鼻孔からストローで吸引する「あぶり」をやってみた。効果は劇的だった。全身に鳥肌が立つような爽快感があり、気分が一気に上がった。心なしか頭の回転が速くなり、集中力もアップしたような気がした。覚醒剤を使えば嫌でたまらなかった職場での人間関係が苦痛でなくなり、それどころか24時間でも働ける気がした。ずっと追い求めてきた「理想の自分」がそこにあった。

最初のうち、1カ月に一度だった使用サイクルがまたたく間に2週間に一度、週に一度となり、そのころには抵抗があった静脈注射をするようになっていく。注射器を使った方が効果が現れるまでの時間が短く、使用する覚醒剤も少なくて済むからだ。

罪悪感はほとんどなかった。職場に行けば日々、嫌なことがたくさんある。それを忘れて仕事を続けるためにも覚醒剤は必要だったし、そして何より、本気でやめようと思えば、いつでもやめられる、と信じていたからだ。

けれど気がつくともやめたくてもやめられない体になっていた。いつしか幻聴や幻覚が現れるようになり、周囲の人間が自分の悪口を言ったり、常に見張られたりしているという疑心暗鬼が頭から離れない。その苦しみから逃れるために覚醒剤を使うという悪循環に陥った。

そのころには東京へ行って覚醒剤を入手するようになっていたので、購入費用も重い負担になりつつあった。収入を増やすために風俗の仕事をしようかと思案するその一方で、このまま続けていたら廃人になる。もうやめたい、と切実に願う。しかし、やめようと思えば思うほど渴望が高まった。白い結晶をスプーンに盛って水に溶かし、注射器に吸い込ませる一連の行為を思い出すだけで舌なめずりしてしまう。いまでは覚醒剤をやめるくらいなら、死んだ方がマシだとさえ思う。

4

3カ月後、美月が病院を退院した。手土産を携えた百合子が「金沢プライベート・リサーチ」を訪れたのは、それからほどなくのことだ。

「お陰さまで娘は入院中に覚醒剤を抜くことができました。禁断症状もそれほど苦しくなかったようで、幻覚や妄想もなくなったんですよ」

安堵の表情で語る百合子の顔には深いシワがいくつも刻まれ、白髪が増えていた。市山が優しく諭すような口調で言った。

「幻覚や妄想がなくなったからと言って回復したわけじゃないのよ。覚醒剤を使ったことのある脳はいつまでもその快楽を記憶していて、自分でも気付かないうちにその人の思考や感情を支配していくの。そこが覚醒剤の怖いところ」

「でも娘は『覚醒剤はやめる』と約束してくれました。もう二度と手を出さない、と」

「覚醒剤の再犯率は5割以上。どれほど強い決意であっても、ちょっとしたきっかけで、また使ってしまう人が多いの。人の心は弱いし、悪魔の誘惑は巧妙に忍び寄ってくる。そして一番の問題は、覚醒剤依存が完全に治ることはないってこと」

「そんな……」

百合子が蒼白な顔色で絶句した。

「やめることそれ自体は簡単なのよ。本当に難しいのは、やめ続けること。お嬢さんはもちろん、あなたにとっても、これから長い戦いになるわ。あなたにはそれを知っておいてほしいのよ」

5

退院した美月は自宅マンションで自宅療養を続けている。娘を一人にしておくのが心配な百合子は仕事が休みがちとなって収入が減り、家賃滞納やガス・電気代が止められることもしばしばらしい。母娘の近況について、「金沢プライベート・リサーチ」で市山と透が話し合っている。「娘が同じ過ちを犯さないように、母親が見守ることは大切よ。だけど、見守る、と監視、は違う。本人にやめる意志がなければ、周囲が何をしても無駄だ、って彼女には言ってるんだけどね」

「所長は個人的にいまもボランティアで母親の相談に乗ってるんですね」

「あたしって乗りかかった船から、いつまでも降りられない女だから」

「男前ですよ、所長」

「そのホメ言葉、あんまりうれしくないけどね」

その数カ月後、美月が「金沢プライベート・リサーチ」に突然、現れた。派手なファッションと濃いメイクで、以前と別人のように変わっている。

「派遣会社に紹介してもらって、来週から仕事するんですよ！ 苦勞をかけたお母さんにもやっと笑顔が戻ってきました。覚醒剤なんか、二度とやりません！ いろいろお世話になり、ありがとうございました！」

百合子が一礼すると、軽やかな足取りで事務所を後にしていく。透が笑顔で市山を振り返った。

「彼女、元気になってよかったですね。もう心配いらないでしょ？」

しかし市山の表情は浮かないものだった。

「どうしたんです、所長？」

「薬物乱用者の典型的な症状が何か知ってる？」

「さあ……なんです？」

「ウソを吐くことよ。ドラッグにハマった人間はドラッグのためなら、どんなウソだって吐く。彼女のいまの言葉が偽りでないことを祈るわ」

市山の不安が的中し、数日後、美月が失踪した。東京都内の繁華街で「殺される」などとつぶやきながら徘徊していた美月が警官に職務質問されたのは、それから半年後のことである。所持していたバッグから覚醒剤が見つかって現行犯逮捕。その時、美月は風俗嬢として働いていたという。